

様々な橋梁、建築技術を学び前例のない木造アーチ構造の「錦帯橋」をつくった児玉九郎右衛門。
大工を取りまとめ統制をしっかりとることで、短期間で「名古屋城」をつくった中井正清。
江戸時代に、土木と建築それぞれの分野で新しい技術や仕組みを生み出した技術者がいた。

偉人伝

the life of a great person

土木
建築

VOL.12

建築

「一五六五年～一六一九年」

中井 正清

Masakiyo Nakai

名古屋城をはじめ
徳川幕府の重要建築を
手掛けた名大工



中井正清は1565(永禄8)年、大和国(現・奈良県)に生まれる。中井家は代々大工を生業とし、父・正吉は法隆寺の番匠であった。1600(慶長5)年、関ヶ原の戦いの後、正清は初代京都大工頭を拝命して畿内、近江6ヶ国の大工・木挽(こびき)の支配をするようになり、棟梁や大工をまとめあげ大工組織を形成する。その2年後、伏見城本丸作事、二条城作事に従事すると、その功績が評価され従五位下大和守が与えられた。徳川家からの信頼は厚く、その後は江戸城や駿府城の天守閣といった重要建築を次々と手掛けていった。

1609(慶長15)年、幕府は名古屋城作事を命ずる。作事奉行には小堀遠州をはじめとした9名が任命され、現場の指揮を正清が執ることになる。江戸城や大阪城を凌ぎ、日本最大の延床面積を誇った名古屋城を、正清は統制のとれた大工組織を活かし、円滑な工事を進め、着工からわずか2年で完成させる。

正清は、大工頭として大工をまとめ技術集団を作り上げ、城郭建築の生産性を高めた人物である。

土木

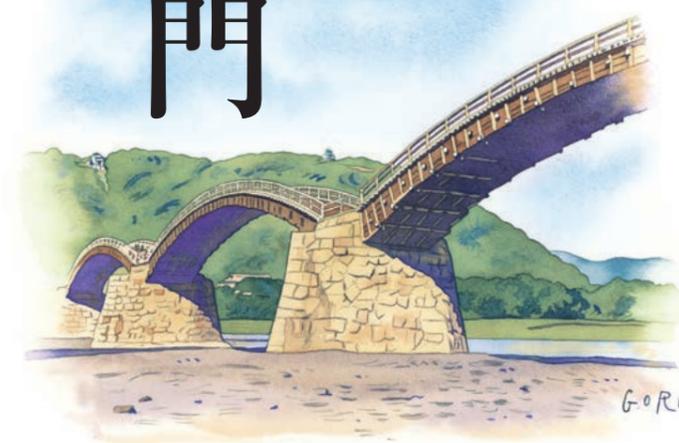
唯一無二の
木造アーチ橋である
錦帯橋を作り上げた

児玉

Kuroemon Kodama

九郎右衛門

「一六〇〇年代」



児玉九郎右衛門は1663(寛文3)年、岩国藩(現・山口県)の3代目藩主・吉川広嘉から、錦川の架橋を命じられた。錦川は水量が多く、洪水のたびに橋が流失してしまう暴れ川であり、広嘉は「西湖遊覧誌」に記載されていた弓なりの連なってかかる石橋のような新しい橋を架けようとしていた。九郎右衛門はこの発想を形にするため、諸国の橋梁や建築の調査を数年にわたって行った。

1667(寛文7)年、九郎右衛門は甲斐国(現山梨県)の猿橋を訪れる。猿橋は橋脚がなく兩岸から張り出した4層のはねぎによって支えられている特殊な橋で、橋桁の木組みの組み合わせを学んだ。1672(寛文11)年には、長崎へ赴き石造アーチ橋である眼鏡橋のアーチ構造を学んだ。その他に宮大工や船大工の技術も研究し、試行錯誤をしながら木造5連アーチからなる錦帯橋を完成させた。完成8カ月後に洪水で流されてしまったが、直ちに原因を分析し再度架橋した錦帯橋は1950(昭和25)年の台風で流失するまでその見事な姿を保ち続けた。

九郎右衛門は、日本各地の橋梁の研究を重ね類を見ない木造アーチ構造を生み出した。